富山市、富山市民文化事業団　共同記者会見

（令和５年３月１日）

■冒頭

市長

皆さまこんにちは。報道関係の皆さまには、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。共同記者会見を始めさせていただきます。着座で説明をさせていただきます。

■中ホール開館に伴う記念公演について

市長

ご案内のとおり、オーバード・ホールの中ホールは、今月末に竣工し、4月以降、大道具や楽器等の搬入や、スタッフの習熟期間を経て、7月１日に開館を迎えます。

現在、開館後の準備を進めておりますが、主催公演の企画につきましては、オーバード・ホールの指定管理者であり、須藤晃（すどうあきら）芸術監督を中心に専門的知識やネットワークを有し、これまでも創造性豊かな公演を展開されてきた富山市民文化事業団に、準備を進めていただいております。

本日は、須藤芸術監督とともに、記念公演のラインアップを発表いたします。須藤芸術監督をはじめ、富山市民文化事業団のスタッフの皆さまにおかれましては、日本を代表する俳優や海外のアーティストを含む出演者との交渉等、中ホールのオープニングに相応（ふさわ）しい公演を実現するため、連日連夜ご尽力いただきましたことに、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

さて、先月の記者会見では、来年度当初予算案の発表にあわせ、開館日に、歌舞伎俳優の坂東玉三郎（ばんどうたまさぶろう）さん、太鼓芸能集団の鼓童（こどう）さんが出演するこ

けら落とし公演についてお知らせいたしました。

この、こけら落とし公演を皮切りに、開館から来年3月まで続く「オープニング記念公演」として、7月には、世界的ジャズピアニストの小曽根真さん、落語家の立川志の輔さん、グラミー賞受賞歌手のクリストファー・クロスさん、バレエダンサーの草刈民代さんといった、国内外で活躍する出演者による豪華な公演、4件をこけら落とし特別企画として開催する予定です。

8月と9月には、小泉今日子さんらの演劇、ＡＳＫＡさんらのアコースティック・ライブ、中井貴一さんらの朗読劇、佐藤隆太さんの演劇、山中千尋さんのジャズライブといった、出演者と観客の距離が近く、センターステージなどの多様な舞台・客席配置が可能な中ホールの特徴を生かした公演を予定しています。

10月以降も同様に、中ホールの特徴を生かし、落語、狂言、演劇等の多彩な公演を開催いたします。こうした記念公演を通じて、本市の舞台芸術の新たな時代の幕開けを市民の皆さまとお祝いするとともに、多様なホールの使用方法をお示しすることで、ホール貸館開始後の利用促進に繋げてまいりたいと考えております。

なお、各公演のチケットは、令和5年度当初予算案について、市議会3月定例会で議決をいただいた後、来月以降に、順次販売することとしております。

では、引き続き、今回のこけら落としに関して、大変にご苦労、ご尽力いただきました須藤芸術監督から、記念公演に込めた思いなども含めて、コメントをお願いします。

須藤監督

富山市民文化事業団の芸術監督をやっております須藤晃と申します。

中ホールで何をやるかということに関して、責任者として、いろいろな

ものの中からこれをやろうということを決めたんですが、その思いというのは、（オーバード・ホールの）大ホールは全国的な意味でも素晴らしいホールで、5 本の指に入るだろうというようなホールなんですが、なにしろ広い。2,000（席）以上のキャパシティーがある。そうすると、そこで出し物となると、例えば富山市民文化事業団がお金を出して製作すると言っても、そんなに数多くの企画はできないんですよね。だから、キャパシティーが 2,000 人入るからといって、売り出してお客さんが 2,000 人必ず来るわけではないですし、そういうときに、私は 40 年以上こういった仕事をやってきましたので、400 から 500（席）の会場が欲しいなと（思いました）。

富山県内には、優秀なホールはたくさんあります。皆さんも行かれたことがあると思いますが、新川（文化ホール）や高周波（文化ホール）、高岡（文化ホール）は今、建て直しているのかな。ほかにも、（黒部市国際文化センター）コラーレなど、いろいろあります。だけど 400 から 500（席）で良い感じのところというのは、ありそうでなかったので、中ホールが造られる時に、椅子を可動式にして、最大で約 650（席）入りますが、もう少し椅子の数を少なくすることもできる（よう要望しました）。それと（中ホールを）造るときは、既にコロナのことが言われていたので、客席間のことも考慮しながら設計をして欲しいと、要望しました。

その結果、中ホールが完成した時に、そこで何をやろうかとみんなの意見を、富山市民文化事業団で働いているプロデューサーは何人もいるんですが、聞いたときにいろんな意見が出てきました。演劇、音楽、それから志の輔さんがいるから当然落語、他にもダンス、踊り、芸術全般に関して言うといろんなことができます。しかも 400 から 500（席）というと、演劇にしても、可能性が急に膨らんだんですね。皆さんご存知のようにタニノくん（タニノクロウ氏）の演劇は、ステージオンステージで、オーバード・ホールの大ホールの上に客席を乗せて 200 から 300（席）の小劇場を大ホールに作って、昔の天井桟敷（さじき）みたいにして公演していたんですね。それ（そのような公演）が、そういうことをしなくてもできるようになったらいいなと思っていました。それが可能になったので、演劇も引き続き、わかりやすく言うと、下北沢スタイルみたいなものをどんどんやりたいと思っています。

音楽に関して言うと、僕は音楽プロデューサーなので、音楽をいっぱいやりたいんですけど、音楽ばかりやっていると、また何か言われそうなので、音楽のものは厳選してやろうと。その時に思ったんですけど、外国人タレントを呼んだらみんなびっくりするだろうなと、僕は思いました。「日本に来ている外国人タレントが富山でも少しやりました」、ということではなく、最初から富山に呼んだらびっくりするだろうなと。その時、藤井市長の顔も思い浮かんで、僕と藤井市長ぐらいの年代の人間が、この前の森高千里（もりたかちさと）さんが来たコンサートみたいに、手を叩いて喜ぶような外国人タレントを呼んだらいいだろうなと（思いました）。それならグラミー賞（受賞者）の中から選ぼうということで、真っ先にクリストファー・クロスがいいと思ったんですね。クリストファー・クロスを嫌いな人はいないですよ。知らない人はいるかもしれないけど。曲を聞いたらわかると思います。そこで、クリストファー・クロスに打診しました。クリストファー・クロスは、歌は AOR【※】でかなり都会派だったんですけど、いわゆる都会派の人ではないので、（富山に）行きたいという話になり、何とか呼ぶことができるようになりました。これは既に決定したので、今日、発表できて本当にうれしく思っています。

【※】音楽ジャンルのひとつ

これであれば来年と言わず、定期的に外国人タレントを呼ぼうかと思っています。その時にどういった人を呼びたいかということは、一般の人からもリクエストがあるかもしれないですが、耳は傾けながらも、自分が持っている芸術監督としての勘で、この人だったらいいな、みんなが来るだろうなと思う人を呼びたいと思っています。だから割と新しい人ではない人にはなると思います。若い人が呼んでほしいと思っているような K-POP のアーティストなどは、おそらく呼ばないと思います。みんなが音楽的に最も豊かだった時代を経験している人たちが、自分たちの青春と重ね合わせて、死ぬほど聞いた音楽みたいなものを生で聞いてもらおうと思っています。

話し出すと止まらなくなるという悪いくせがあるので、この辺で今回のラインアップ等を映像にしてもらったものがあるので、それを見ていただいて、そこから富山市民文化事業団のスタッフが、この中ホールに込めた

思いをくみ取っていただければと思います。ありがとうございます。

※記念公演に出演予定の皆さまからのメッセージ動画の再生
（約 3 分 30 秒）

==========

■質疑応答

記者
　最大 652 席の客席を持つホールということで、今後、市民の方にどのように使ってほしいか、市民にとってどのようなホールになってほしいか、お二人に伺います。
　また、藤井市長に伺います。富山市内には、市民プラザのアンサンブルホールや県民会館、県の教育文化会館など、数百人規模のホールが既にありますが、それらのホールと新しいホールのすみ分けをどのようにお考えですか。

須藤監督
　こちらから、こういうホールになってほしいという思いは、特にありません。新しい施設で、これだけ内容の濃い公演も多いので、その興味で最初は皆さん集まってくると思うんですね。そこから市民の方々が、自分たちのホールとして創っていっていただければ（と思います）。

　また、通常、東京でも大きいホールというのは、一つの建物の中で、大ホール、中ホール、小ホールと分かれているのがほとんどです。ところが、本当に運良く、（オーバード・ホールの）後ろの土地が空いていて、全く別物として造って、二つをつないでいないんですね。これは奇跡的だったと思っています。なぜかというと、同時に、同じ日にイベントが開催されると、大体、大混乱になるんです。（分かれていると）それがありません。つまり、片方は子ども向けの公演をやっていて、片方はもう少し難しいクラシックのコンサートやっているような状況がおきる。東京で、そのようなことを散々経験してきたので、それ（建物が別になるということ）はとても良かったと思います。

ただ、中ホールは、普段、一般の人たちが使えるような施設もありますので、そこで皆さんが憩える場所というとおかしいですが、ここはこうなっていってほしいというような意見が出て、どんどん形を変えていったらいいのではないかと思います。

市長

どのような使い方をしていただきたいかということは、先ほど監督（の話に）もありましたが、市民の皆さまが、オーバード・ホールでは大きすぎるということがありました。例えば、民謡の会の発表会や地元の踊りの会、バレエの会、高校や中学校の発表会を地域の人やご家族を呼んで行いたいという時に、500 から 600 席というのは、非常に（使い勝手が）良いわけです。地元の方々が主催で、地元の方々にお披露目できる、発信できるような使い方は、今までと違って、普段使いしていただけるのではないかと思います。

加えて、音響等も含めて、かなり良いものに仕上がっていますし、ステージと客席の使い方も自由度が高いわけです。監督がおっしゃるとおり、こけら落とし公演や特別公演に来ていただく中で、どんな使い方ができるか、市民の方に知っていただくというのは、まさにそのとおりで、それをご覧いただいて、自分たちの公演だったらこういう使い方がいいなということを感じて、市民の皆さまや県民の皆さまに使っていただければ良いと思っています。

また、教育文化会館や市民プラザのアンサンブルホール、中ホールなど（のすみ分け）ですが、建てられた年代が違いますので、老朽化したものはスクラップしていかなければいけませんし、それぞれ客席数も少しずつ違ってくると思います。（中ホールの）使い方は、教育文化会館の使われ方に近いと思います。建てられた年代は全く違いますし、私が常々言っているように、公共施設は、県であろうが市であろうが、やはり良いものを一つ造って、お互いに乗り入れて使うといった、そのような時代に入っていると思います。ですから、そのような面からも、中ホールの使い方というのは、重ならないのではないかと思っています。

また、桐朋学園のクラシックなども非常に楽しみです。オーバード・ホー

ルでは広いので、中ホールにぴったりだと思います。

==========

記者

先ほどの監督の話の中で、最近の K-POP などというよりは、音楽が最も豊かだった時代という表現をされましたが、少し上の年代に受けるような方を呼んでいきたいというお話でした。

例えば今後、若い方などにも積極的に使ってもらう、次の世代の方にも親しんでもらうために、どんなことをされたいですか。また、上の年代の方がよく知っている方を呼んで、若い人たちにこういうことを感じてもらいたいということがあればお聞かせください。

須藤監督

若い人にも芸術に興味を持ってもらいたいというのは、当たり前ですよね。ただ、自分が芸術監督でいる間は、もともと、子どもたちにも本物を見せたいというポリシーでやり始めたので、自分はそうやって芸術監督に指名されて、最初の所信表明でそのようなことを言ったので、もちろん途中で、子どもたちに受けるような公演も今までやってきて、お客さんも入りました。でも、中ホールができて余計に（感じますが）、お客さんが来るのを見ていると、ほとんど 40 代、50 代、60 代、70 代、決して若くない人たちがお客さんの 8 割ぐらいです、オーバード・ホールに関して言うと。だから、会館に行こう、公演を観に行こうという習慣を持っている人たちにアピールするというのは、企画側として、それは当たり前のことだと思うんですね。子どもに受けるからこれ（子ども向けの公演）もやって、そうすると子どもは喜んで来るだろうけど、どこを向いて作っているのかということで言うと、僕は、先に申し上げたような感じですよね。別に子どもたちを無視したり、若い人たちに向かって発信することはしません、ということを言っているわけでありませんので。

==========

※発言内容を一部整理して掲載しています。・・・富山市広報課